

中期ビジョンについて

シャプラニールが目指す「すべての人々が豊かに共生できる地球社会」は、ひとつのNGOだけでは実現できません。自分の暮らしや社会をより良くしたいという市民一人ひとりの「想い」と、実践という「行動」によってはじめて具体性を帯びてきます。次の3年間は日本国内のみならず、バングラデシュやネパールにおいても「想いを行動に移すきっかけづくり」に重点的に取り組み、行動する市民が「つながり合う」ことによって、社会的な課題を解決することを目指します。

中期ビジョン 2013～2015

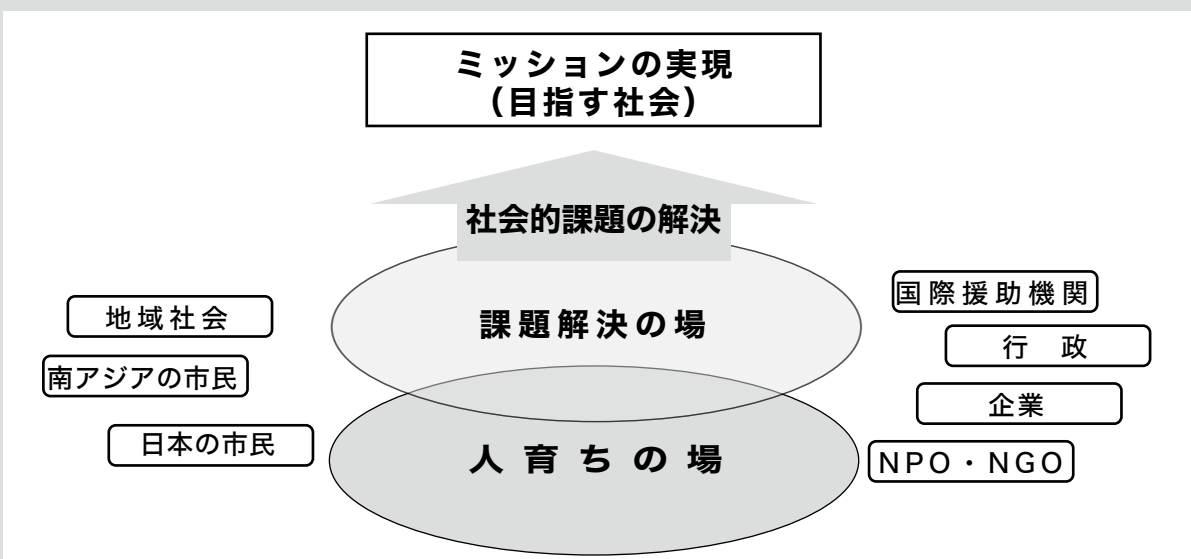
シャプラニールは、次の3カ年において、市民が「すべての人々が豊かに共生する地球社会の実現」を自らの課題として認識し、一人ひとりが行動に移す「場」をつくることにより、さまざまな社会的課題の解決を目指します。

1. 課題解決の場・・・多様な人々・組織がつながり合う「場」

シャプラニールは、問題意識を共有する個人や組織、とりわけ社会に対して大きな影響力を持つ企業、行政等呼びかけ、それぞれの技術・技能、知恵、資金など提供できる資源を持ち寄り、社会的な課題の解決に向けた道筋を見出していきます。

2. 人育ちの場・・・行動を起こす人が育つ「場」

シャプラニールは、市民一人ひとりがさまざまな社会的課題を自らの問題として捉え、主体的に行動することの意味や影響力を自覚し、社会を変革する力であることを実感、成長できるよう促していきます。



中期ビジョンの背景

中期方針 2007 - 2012 では、経済的な発展や開発援助から「取り残された人々」に焦点を当て、特に中期方針期間の後半では「取り残される人々」だけではなく「取り残された人びとを取り巻く周辺の人々」へも働きかけを行って来ました。社会的弱者を生み出す社会構造の理解や市民社会への働きかけの重要性を意識し、家族、学校、地方行政、市民社会へと段階的に範囲を広げていきました。

こうした中、たとえば少女たちが活発に活動することで、その地域の少年やおとなたちも刺激を受けて、地域のために動き出した事例を目の当たりにし、一人ひとりが持つ可能性や役割の重要性も再認識するに至りました。

日本国内では、長引く経済の低迷に加え、深刻化する貧困問題や自殺者の多さに象徴される「生きにくさ」の問題など、さまざまな課題に対する効果的な解決方法が見い出せていません。日本経済の復興を望む世論が大勢を占める一方で、「経済的に豊かだからと言って心豊かに暮らせるわけではない」という経済至上主義への反省から、生活のありようを考え、行動に移している人や組織も増えてきています。「心の豊かさ」を大切にすることは、私たちが南アジアでの活動から学び発信してきたメッセージであり、これまでも増して、日本と南アジアの連携を強く意識した活動を展開することが必要であると考えています。

さらに、東日本大震災後にシャプラニールが取り組んだ国内で初めての緊急救援活動では、地域連絡会*やクラフトリンク活動、企業やNPOとの協働など、さまざまな形の連携の重要性を改めて実感しました。また、複数の異なる立場の関係者で社会や地域の課題の解決策を

話し合う「マルチステークホルダーアプローチ*」など新しい取り組みが始まり、注目されつつあります。

途上国支援の担い手はもはや NGO と ODA に限定されるものではなく、企業や個人がビジネスや投資の枠組みを活用して直接支援に取り組む動きまで目立つようになってきました。また企業の社会貢献事業に NGO が参画することで社会的にも影響を与えうる協力関係が進む一方、NGO もその事業運営能力を高めていくことが求められています。

同時に NGO 活動の社会的な影響に対する国際的な評価基準や、市民団体の行動基準が策定されるなど、市民組織による事業の信頼性の確保がより強く求められるようになっていきます。

私たちが活動する南アジア、特にバングラデシュでは企業活動が活発になって来ました。日本企業の進出もここ数年で増加し、当会への相談や問い合わせも増えています。農村部の若者が職を求めて大量に都市へ移動すると同時に都市部でのライフスタイルも変化し、人々の暮らしに大きな影響を与えています。また、ネパールでは長引く政治状況の混迷と産業の停滞から、海外への出稼ぎや移住者が年々増加するとともに、農村部では都市部への人口流出が進み開発から取り残されています。

こうした状況を見据え、私たちのミッション実現へと歩みを進めていくことを目指して今回の中期ビジョンを策定しました。